

恩師 高濱介二先生からの学び

— 私がひそかに大切にしてきたこと —

白井 舒久

What I Have Learned from Professor Emeritus S. Takahama

— The Important Lessons I Have Kept in My Mind Dearly and Secretly —

Nobuhisa Shirai

2007年1月22日受理

はじめに

高濱介二学長（以下先生と略す）が、2002年に開設された大阪健康福祉短期大学の初代学長として2期4年の任務を全うされ、2006年3月にご勇退なさいました。その間のご指導とご尽力に心から感謝申し上げます。

さて、先生の退任にあわせて本学の紀要編集委員会は記念特集号の性格をもたせた編集を企画したようがあります。その際、私に課せられたものは何かといえますと、大阪教育大の大学院時代の恩師であり、開学時から同じ職場の教員として仕事をするようになった関係から、ひとつ先生のために書きなさいということのようです。

しかしながら、浅学菲才なだけでなく、まともに勉学に集中しなかった不肖の「教え子」院生であることから、却って先生の崇高な業績や尊厳さを傷つけてしまうのではないかと不安で一杯です。そのため、ぐずぐずして、その結果原稿提出が遅れました。優柔不断は周りのひとに迷惑をかける見本とあいなった次第です。

さて、それでも清水の舞台から飛び降りる心境で、失礼を省みず恩師（不肖でも秘かに思っている）からの私なりの学びについてまとめてみたいと思います。

1. 高濱先生に懂れて

（1）教育の階級性の問題から

私が大阪教育大の大学院で学びたいと思った理由は、35年前に遡る。当時名古屋大学で教育哲学（田浦武雄ゼミ；デューイ研究者）を学んでいた。私の研

究テーマは「ブラメルドの改造主義教育思想における階級と教育」で、教育の階級性の問題に関心をもっていった。

戦後の日本の教育は、アメリカのそれも「新教育」の中心人物であるデューイの影響を受けていた。しかし、「這い回る経験主義」教育の批判を受け、学力も生産力もあがらない結果から、見直しが検討された。さらに1959年のソビエトの人口衛星スプートニクの成功は、アメリカを「国家安全上の危機」として認識せしめ、その結果、アメリカを国防教育に力をいれさせていくことになった。

私は、アメリカの影響下にある日本の教育について、デューイ以降の教育思想の動向に着目し、これからの日本の教育の方向を予測し、対峙すべき教育思想を考えるため、デューイ左派のブラメルドの改造主義教育思想を選んでみた。とりわけ80数種の多人種国家であり、高度に発達した資本主義であるゆえに、改造主義教育思想が階級と教育の問題にふれていることは興味深かった。結論としては、教育量（教育を受ける質量は、ブルーカラーより、ホワイトカラーに多い。そして階層上層移行は教育の質量に影響されるということであった。問題は現象としての教育の質量の差は、資本主義における基本的な階級矛盾による「教育の階級性」としてとらえるのではなく、表面的な階層論でぼかされていたことにある。しかし、ここからがなさない。科学的世界観や科学的方法論に弱いため、気持ちだけ挑戦したものの批判的検討はほとんどできなかった。こうなると本格的に学ぼうと思えば、それらを学べる学風の在るところ、或いは人について学ぶ以外道はないと思ったわけである。

(2) 科学的教育学への志向

これから学ぶにしても、名古屋を出て、東か西か、経済的にやっつけられるかなど迷いに迷った。そうしている時、岡本定男氏（現奈良教育大学教授）から大阪教育大のこと、教育科学研究会のこと、日本科学者会議での哲学研究会のことなど情報を頂いた。伊藤彰男氏（現三重大学教授）からも現代教育科学研究会の情報も頂いた。1970年に現代教育科学研究会編「国民のための教育科学」汐文社がだされた。これを手にして初めて、これまで耳にしてきた情報のうえに「高濱介二論文」を読み、先生をより知ったというわけである。この時、藤本文朗先生（現大阪健康福祉短期大学教授）、秋葉英則先生（現大阪健康福祉短期大学学長）など当時若くて勢いのある研究者が名前を並べておられた。このリーダーが先生であることも耳にした。今関西が燃えている。大阪教育大にいく決心ができた。ちなみに、この高濱論文は「教育労働の役割と本質」について論じたものである。それは科学的世界観と方法論による展開で、科学的教育学の構築をめざすものとして評価されるべきものである。

(3) 大阪教育大の状況

①大学はストライキ

当大学の門をくぐる時は、大学ストライキ決行中であった。障害者の入学問題で障害ゆえに入学ができないことに端を発したもので、いつ授業再開か見当もつかない状況が続いていた。院生だからと学生たちは私を大学構内にいれてくれたが異様な状況で学習・研究環境としては最悪であった。

先生は、大阪健康福祉短期大学の学長時、障害者の入学問題が関係すると必ず大阪教育大のこの問題をだされていた。教授会では「ひとりでもがんばる」をモットーに障害者の教育権保障に尽力されている姿が目につかぶようでした。

②変革の精神—理論と実践の統一にむけて

一方、民主的な大学づくりに院生が力をいれ、院生協議会の結成を目指して取り組むことになった。「大学の自治」「学問の自由」を掲げて半数以上が加入し、1年以上の時間をかけて結成に至った。先生は、院生の主体的な組織作りを暖かく見守ってくれていたが、授業・ゼミはこちらが休講にしているようなもので、先生は大変心配されたことだと思う。

その後、私たち2名の修士論文中間報告の遅れが目立ったとき、「どんなに忙しくとも、やらなあかんのや」と、射抜くような鋭い目と真夏でも寒気がするほどの迫力ある声で一喝された苦い思い出も、今となっては楽しい思い出になっている。おかげでどうにか修士論文をかきあげることができた。修士論文は「現代特殊教育論」で、1960年代のわが国の経済政策と特殊教育振興政策の問題を中心に批判的検討をおこなったものである。

さて、この喝は、その後の私の福祉実践現場や行政での精神を支える糧となった。福祉現場で職員と共に頑張ったり、必要に応じて職員を叱咤激励するときもそのときのことがオーバーラップしたものだ。

2. 福祉実践現場で大切にしてきたこと

私は、修士終了後は進路に複雑に悩みながら、結局ゼロから出発のつもりで、杉山隆一氏（現鳥取大学教授）の紹介もあり、当時の園長であった細川順正氏（現徳山大学教授）とお会いし、寝屋川市立の障害児通園施設「あかつき園・ひばり園」に児童指導員として入職した。障害乳幼児の発達保障の実践はまさに新しい取り組みであったため、試行錯誤しながら科学的取り組みや理論化をめざしながら、保育・療育の発展をめざすものであった。子どもの遊びや遊戯の展開に戸惑いながらの実践は、これまでの自分の世界にないものであり苦痛の面もあったが、新しい世界も切り開かれる楽しさもあった。

障害児通園施設は、昭和48年前後に「障害乳幼児にも保育の場を」という障害児家族、関係者の願いが基になって開設されている。それまで障害乳幼児は、保育所や幼稚園には障害児を受け入れる「専門性」がないこと、「施設・設備の条件」がないことなどが主な理由で入所・入園を拒否され、在宅生活を余儀なくされてきた。その意味では確信をもって指導、援助できるものはないわけである。それこそみんな、保護者とも協力しあって療育をすすめる必要があった。

その実践のなかで私が大切にしてきたものを整理してみると、これまでの先生からの学びが、私の体の中にいつの間にか流れていること改めて感じるのである。

以下それらを簡単に列挙してみたいと思う。

(1) 科学的態度について

①事実に忠実な実践家であること。

ひとつひとつの実践は、指導者のねらいに基づいて、その子のためによかれと思って行うものである。しかし、うまくいかないときは、子どもが問題なのではなく、ねらい、かかわり方、子どもの理解などひとつひとつ点検し、総括する必要があるということなのである。事例を出していえば、自閉症あるいは傾向のある子の常同行為や固執傾向をよく観察・分析して仮説、実践をおこなうことが大切なのである。

固執傾向（狭い範囲での興味関心）と常同行為（心の安定のための杖）を捉え違いし、一生懸命そらしの実践的かかわりをする失敗例。子どもはそれで喜ぶときがあるがまた繰り返すから間違いがわかる。

②問題解決への謙虚さ

我をむきだしにして自分の考えや方法に固執するのではなく、実践の結果に忠実になり、自分の実践が「本当にその子のためなのか」を点検・吟味することによって初めてよりよい実践へと向かう。このことは事実上忠実であることと同じことである。

③集団討議経る

こどもを「丸ごととらえる」には、24時間を通して把握する必要がある。したがって、一人一職種でなく、多くの人の、他職種との連携が必要で、いろいろな角度から捉える必要がある。まして24時間であるから、保護者と連携して協力し合ってこそ子どもを「丸ごととらえる」ことができ、発達を促すことにつながるのである。そのうえで子どもへのかかわり方を集団で討議することが実践をより科学的に導くのである。

④集団討議と決定の断固実践

集団討議（この集団には、小、中、大などいろいろあるが）の決定に基づいて、全員がそれぞれ、決めたことをやりきることが大切である。成功にしても、失敗にしても、それは全員で評価・反省することであり、それがなぜであるかが、明らかになるから。そのことが理論化へつながるものである。

(2) 実践と理論を自らのうちに統一する

療育は、理論と実践が自らのうちに貧弱であっても統一されていなければ効果をあげることも、実践の総括もできない。したがって実践、集団討議（総括）、理論学習、そして実践という療育過程が必要である。実践すべてに通じると思うが、このことを通して創造的実践がうまれるし、実践家自身も輝ける。

実践現場2年目から細川順正初代園長が提唱し実現

した「事業年報一歩き続けよう」（ちなみに第1号編集長は私）の編集、「園内学会」の実施はまさにそのことである。それを継承した私は「園内学会」と「事業年報」を結合させ、「療育実践研究」へ発展させ、専門的力量的の向上、実践の理論化に努力してきた。職員からは、しんどいから「園内学会さえなければ、実践研究誌さえなければ楽になるのに」とぼやかれつつ、やってみると問題が整理できた、新たな課題が明らかになったと喜び合えるのもまた事実なのである。「しんどいけど、それでもやらなあかんのや」は先生の私への「喝＝激励」であったが、思わぬところで先生の精神が生きていたとあらためて思うのである。

(3) 院生時代に印象残った先生の言葉から学んだこと

①自己運動（矛盾と発展）の論理について

ものの発達・発展の原動力は、自己運動にある。このことを歴史的・社会的に捉えたのがマルクスだ。マルクスの偉さはそこにある。

他方、人間発達における原動力は何か、について先生は、コスチューク（ソビエト心理学者）は、そのマルクスの社会発展の原動力としての自己運動を、個人のレベルまでおろしたところに値打ちがあるんや。これはとてもわかりやすく、スーと頭に定着した。このことが、私の実践における発達理解と実践に力になってくれた。（詳細は後述）

②発達保障論の理解に関連して

京都大学名誉教授で全国障害者問題研究会の初代委員長であった、田中昌人氏の発達の階層一段階理論は障害児等への実践から理論化されている。内容はかなり難解で宇宙用語ともいわれた概念を駆使して理論が展開されていた。階層には回転軸、示性数、次元、変換、段階は3節あり、1, 2, 3形成・可逆が存在するとする。人間の発達の道筋は基本的に同じであり、それぞれの発達の節で誰もが躓き乗り越えていく。この乗り越えに適切な教育が必要である、といったことである。個人、集団、社会の発達の系が存在し、内的に関連しあって発展するともいっている。この理論は障害児の教育・療育に苦戦していた私たち実践家には役に立ったし、いまなお発展している。

③園における発達診断と指導のとりくみから

あかつき園は、肢体不自由児通園施設で、ひばり園は知的障害児通園施設で、通園してくる乳幼児の障害や程度は多様である。

昭和49年、京都府立大学の長島瑞穂先生の協力と指導で園もこの理論を学び実践した。この学びから、階層—発達段階論はまさにピアジェ、ワロン、ソビエト心理学、科学的世界観などまさに諸科学総合の努力の成果だと思った。実践も次第に向上した。その後園では、発達相談員を専門職として位置づけながら、多様な職種による総合的療育へと発展していく。

④発達段階理論のとらえなおしと先生の言葉(ヒント)

私は、この発達段階理論は諸科学総合であり、きわめて実践的であると認識している。しかし、年々対応の困難なケースへの取り組みに苦慮することも増加してきた。障害児の重度化、重複化、多様化である。園での療育目標の一つには、就学までにできる限り「1歳半の節」を乗り越えさせたいと考えている。予後が大きく異なるからである。そのためには今一度発達段階理論の位置と意味、その効果的活用をするために一工夫必要だと感じるようになった。

そこで頭に浮かんだのが、高濱先生のマルクス、コスチュークの評価である。とすれば、田中昌人氏はコスチュークの自己運動を一步進めて、その自己運動のメカニズムを明らかにしていると理解できる。それならば、見田石介氏「資本論の方法」が連想された。子ども一人ひとりを自己運動させている矛盾、基本的矛盾が何となにであるのか、それを把握し消滅させるべき因子と豊かに力づける因子を具体的な力においてとらえてみようとした。たとえば1歳台前半は「自分で、自分で」の気持ちと言語で表現できないが育っているから、これに力を蓄えて乗り越える力をはぐくむ。反対に、「される」のイヤだから、これを抑える。こうした捉え方ができるようになると実践はかなりよくなる。田中昌人氏の発達段階理論の理解にも一役買っていただいていたことをそっと付け加えておきたい。

おわりに

高濱先生と教育の仕事を、同じ職場で行うなど夢にも思っていませんでした。まして、この寄稿文など分不相応で恥ずかしい思いです。先生からの学びを学問的に継承し、さらに発展させる優秀な教え子でなかったことが、先生の不運であったようですね。お詫び申し上げます。しかしながら、教育一筋でなく教育一福祉—教育と両方を渡り歩いた結果、多くの体験をさせ

ていただき、それゆえ先生の最後の職場でご一緒させてもらえたことは人生の皮肉というか、面白さを感じてもいます。本原稿を書きながら改めて先生の偉大さを実感しています。そして、十分先生の意にそえないもどかしさをお詫びしたいと思います。先生はこれから研究者人生の総仕上げですね。お体を大切にされ完成されることをお祈り申し上げます。

(しらい のぶひさ 本学教授)